

三浦市立三崎中学校

研究テーマ：確かな学力と豊かな社会性を育むカリキュラム
～思慮深さを育むカリキュラムデザイン～

1 実践の目的

本校生徒の課題は、考えることをすぐに諦めてしまったり、考えなしの言動をしたりすることにある。そこで、校内研究を核にした「生徒が主役の学校づくり」を目指し、生徒の思慮深さを育むことを目的とした。

2 実践の内容

令和3年度より授業改善アドバイザーの三浦 修一 先生を招聘して継続的に授業改善を進めるとともに、カリキュラムデザイン、学習評価の在り方についても研究対象に位置づけ実践を行った。

(1) 校内研究の組織体制

校内研究を学校としての研究とするべく、研究推進委員会を中心に全教職員で実践研究に取り組んだ。

(2) 校内研究全体会

年間6回の校内研究全体会を設け、うち4回は授業研究会を併せて行い、すべての教員が必ず1回は提案授業を実施した。

(3) 授業研究会

授業研究会は教科横断的な視点で協議をするため、3つのグループ(資料1)に分け、グループごとの提案授業、生徒カンファレンス、グループ協議、全体会の流れで行った。

- A 言語能力グループ
～国語、美術、音楽、外国語
- B 情報活用能力グループ
～数学、理科
- C 問題解決能力グループ
～社会、保健体育、技術・家庭

資料1 授業研究会のグループ分け

(4) 単元デザインシート

提案授業では、「学習する生徒のための授業計画」(資料2)の考え方のもと、「単元デザインシート」(資料3)を作成した。

- ① 授業の全体像をあらかじめ学習者に示す。
- ② 評価規準を明示する。
- ③ 学習活動の内容について学習者が理解した上で授業を行う。
- ④ 「振り返り」により、学習者が自身の学習を確かめることができるようにする。

資料2 学習する生徒のための授業計画

本校の「単元デザインシート」は、これまでの開示型学習指導案を進化させたものである。生徒が「自覚的に学ぶ」ことができるようにするために、記載内容を絞り込んでいく。また、各教員は、キャッチーな言葉を使用したり、毎時間の流れを視覚化したりするなど、生徒が主体となって学習を進めていくための工夫を施した。

この「単元デザインシート」は、授業者にとって、授業の目標と学習活動がマッチする授業プランを作成することはもとより、単元の核となる問いを作成してその解決に

第3学年英語単元デザインシート Lesson2 (4月～5月)

単元名：～「受け身形」を使って、歴史年表をつくらう！～

目標：「受け身形」の使い方を理解し、歴史上の人物がしたことや出来事について表現することができる！

1時間目 「2つの文の違いは受け身形にどうして理解しよう！」	2時間目 「受け身形をたくさん使ってみよう！」 ①②③【プリントの記述、取組みの様子】	3時間目 「受け身形が使われた文を詳しく見てみよう！」	4・5時間目 「歴史上の人物や出来事を紹介しよう！」④～⑥まで書いてみよう～ ④【プリントの記述】 ⑤【取組みの様子】	6時間目 「歴史上の人物や出来事を紹介しよう！」⑦～⑧まで発表しよう～ ⑦【取組みの様子】	7時間目 「振り返り」 ⑧【取組みの様子】
-----------------------------------	---	--------------------------------	--	---	-----------------------------

<評価規準 (これができたらOK！)>

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
①受け身形の特徴や決まりを理解して、話したり文の中で書いたりすることができる。 ②他の人の発表について受け身形を使ってやりとりすることができる。	③どのように受け身形を用いるのが適切かを考えて、考えや気持ちを表現している。 ④受け身形や敬語の文法を使って、歴史上の人物がしたことや出来事について、工夫して表現している。	⑤受け身形や敬語の文法を使って、歴史上の人物がしたことや出来事について、工夫して表現しようとしている。 ⑥どのような場面で「受け身形」を使うのかを理解して、求められる条件に合うように適切に用いたり、より良い表現にしようとしていたりしている。

資料3 単元デザインシートの例

向かうように授業をデザインすることについても、これまでの学習プランに比べて容易かつ俯瞰的に考えることができるという利点がある。

(5) 授業カンファレンス

事後研究として授業に対する生徒の意見を聞く「生徒インタビュー」をこれまでも実施していたが、“授業の主役は生徒である”という認識を前面に出すため「カンファレンス」と名称変更を行った。そして、カンファレンスの時間も含めて教員と生徒とは人格として対等の立場にあるということを確認するようにした。

(6) 単元ごとの学習評価

中学校現場では学習評価の結果が進学資料となることからその説明責任が大きな課題であり、多くの中学校では客観性を重視するあまり、定期試験を中心とした「資料ベース」の成績処理が行われている。

しかし、それでは事前に設定した単元の評価規準が成績処理時に反映されないことになり、「指導と評価の一体化」が充分に図られないことになる。

そこで、本校では令和3年度から「単元(題材)ベース」の成績処理に取り組んできた。令和4年度からは定期試験についても単元(題材)に紐づけた作問を行い、評価へ反映させている。

また、観点別学習状況の評価に係る記録の総括について、評価結果を点数化せず「評価結果のA,B,Cの数を基に算出する」ことにも取り組んできた(資料4)。

各単元(題材)の

- ・すべての評価がAまたはA⁺であり、半数以上がA⁺のもの=A⁺
- ・半数以上がAまたはA⁺であるもの=A
- ・3分の2以上がC⁺であるもの=C⁺
- ・すべての評価がCまたはC⁺であり、3分の2以上がCのもの=C
- ・上記以外のもの=B

資料4「A,B,Cの数を基に総括する」

その結果、今年度はPCを使わずに成績を算出する教員や単元ごとの評価結果を生徒に配布する教員も現れ、教員・生徒とも「単元で育むべき資質・能力」をより意識するようになってきた。

3 実践の成果

今まで一人ひとりの教員が行ってきた授業や評価などを、「一個人」としてではなく、「学校」として考える雰囲気が出たことが、大きな収穫であると考えている。

教員が、自ら創意工夫しながら、主体的に単元づくり、授業づくりに取り組むようになり、子どもの成長に結びつく学びの在り方について、グループで議論を重ねながら1つの形にしていく作業に、多くの教員がやりがいを感じるようになった。

特に、11月に実施した研究報告会では、若手教員が提案授業の授業者になり、報告会に向けて、同じチームの教員とともに授業づくりを行い、授業改善アドバイザーの助言を受けた。当日は市内外からの参観者と協議をし、授業者だけでなく、本校教員全体の授業力向上の機会となった。

4 今後の展開

カリキュラム・マネジメントは、管理職や各主任レベルだけではなく、現場の教員が日々の教育活動の中で実践できていることが重要になる。

単元デザインシートを用い授業をデザインすることは、日々の授業の在り方を見直し、教員一人ひとりがカリマネを行うことである。

新しい単元に入る時には、『単元デザインシート』を用いて単元づくりと授業づくりを行い、単元が終わった時には、取り組みを振り返り、その後の授業改善に結びつけていく。